

「木場の窓から見えるもの(元外交官の視点)」

当社顧問石井正文氏(前駐インドネシア日本国大使)による
気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

第54回:カンボジアの二重苦;「結果」で判断してはどうか

2023年8月10日配信

【ポイント】

■7月23日に5年振りにカンボジアで行われた下院議員選挙は、有力野党不在の出来レース。

目的は、安定的な世襲の実現。一党独裁の長期化とあからさまな世襲の導入には西側の批判多数。

・一方、世襲を予定されているフンセン首相の長男フン・マナエト国軍副総司令官兼陸軍司令官(45歳)は、1999年にアメリカの陸軍士官学校を卒業。その後、イギリスのブリストル大学で経済学の博士号をとるなど、欧米で教育を受けてきた人物。昨年2月には訪日し、岸田総理大臣と会談するなど、外交舞台でも存在感

■選挙2日後の7月25日、FT紙は、以前から中国が使用するのではないかと話題になっているカンボジアのリアム海軍基地が完成間近。

カンボジア・中国双方共、中国軍による使用を否定しているが、噂は根強く、これもカンボジアの頭痛の種。

■この双方共、冷静に「結果を見て判断する」(マナエトの実際の外交上の立ち位置と統治能力、リアム海軍基地については、それが完成後実際どう使われるのか)ことが妥当。日本政府は、今後のカンボジアの立ち位置を見極めながら関係をかじ取りしていきたいという冷静な反応。今後、米国も同様の反応をするように、日本からも働きかけていくべきだろう。

【本文】

■カンボジアでは、7月23日に任期5年の下院議員選挙を実施。

- ・今回の選挙は、野党不在の出来レースで、1979年からフンセン首相率いる現与党カンボジア人民党が大勝。
- ・人民党政権は、2013年総選挙で躍進した最大野党・救国党を2017年に解党に追い込み、前回の2018年総選挙で史上初めて全議席を独占。
- ・そして今回の総選挙に先立つ2023年5月、救国党の流れをくむ唯一の有力野党であるキャンドルライト党を排除。今次選挙でも、再び人民党が圧勝。
- ・下院定数は125。今回の投票率は、前回の83.02%を上回る84.6%。大勢はフンセン首相自身が表明しているように、人民党の「地滑りの勝利」。5日発表された正式結果は、人民党120議席、得票率96%。8月22日にマナエトが首相に就任予定。

■ 今回の総選挙の目的は安定的な世襲の実現

- ・実際は、キャンドルライト党を排除せずとも人民党の勝利は確実だったと思われるが、なぜここまでの強硬手段に出たのか。それは、首相在職39年目になるフンセン首相にとり今回の選挙の最大目的は、「安定的な世襲の実現」だから。
- ・フンセンは、今回の総選挙で「圧勝」することで、長男フン・マナエト国軍副総司令官兼陸軍司令官（45歳）への首相職世襲を安定的に進めようとしている模様。
- ・当然のことながら、一党独裁の長期化とあからさまな「世襲制」に対しては、「西側」の批判は強い。我が国も、「国民の多様な声が反映されるような環境で選挙が行われることが重要」という基本的立場であり、今回の選挙を巡る状況については「懸念を持って注視せざるを得ない」との立場。

■ マナエト氏自身は西側で教育を受けたまともな人材。政治経験には欠けるがバランスが取れ、強権的でも無く、能力は優れているとの評価が多数。結果で判断すべきでは。

- ・マナエト氏は、1999年にアメリカの陸軍士官学校を卒業。その後、イギリスのブリストル大学で経済学の博士号をとるなど、欧米で教育を受けてきた人物。
- ・去年2月には日本を訪れ、岸田総理大臣と会談するなど、外交の舞台でも存在感を示している。
- ・専門家によれば、カンボジア国内でも、偉そうな感じはなく、比較的、温和で優しそうなイメージで、欧米諸国とのつながりもあるので、父親よりは強権的にはならないのではないかと期待している人が多い模様。
- ・直接面会した駐カンボジア植野・日本大使も、個人的な印象として、欧米での高等教育を受けて、非常に教養が豊かで、人当たりもよく、気さくな人物で、陸軍司令官としても軍の改革に実績を上げるなど、非常に有能な方であるとの印象を述べている。

■ カンボジアにとってのもう一つの頭痛の種は中国に対し自国のリアム海軍基地を使わせるのではないかと 言う疑惑

- ・7月25日付FT紙は、以前からあるカンボジアのリアム海軍基地を中国に使わせるのではないかと
の疑惑を、殆ど完成に近い同基地の棧橋が、中国の唯一の海外基地であるジプチの棧橋と酷似している（衛星写真による形状の類似性。特に、中国空母も接岸可能な335mの長い棧橋の存在）ことは建設に中国が携わっていることの証左であるとして、報道。
- ・この疑惑は従来から報道されており、カンボジア中国双方共これを否定している（カンボジアは、同国憲法によれば、同国基地を外国軍に使わせることは禁じられていると表明している。）が、疑惑は根強い。
- ・なお、中国はこれまでに南シナ海の埋め立て島やサンゴ礁に数多くの基地を建設しており、それに加えリアム海軍基地を建設する利点がどこまであるかについては議論がある。
- ・もちろん、米軍は、南シナ海の中国基地攻撃には躊躇は無かろうが、リアム基地を攻撃すれば、カンボジアと事を構えることになる、との問題がある。
- ・またリアム基地は、場所的に、海上交通の要衝であるマラッカ海峡への中国のアクセスを一層容易にする、との問題もある。

- ちなみにカンボジアは、日本外務省の世論調査で、将来どの国をより頼りにするかという質問に対して、常に中国の方が日本より上にくる所謂スモール3と呼ばれるASEAN加盟国の内の一国(他は、ラオスとブルネイ)。
 - ・ただ、スモール3の中では、名目GDP、人口、国防費共に他の二カ国に比べて頭一つ上の存在。
 - ・特に、人口は1600万人で、ラオスの750万人、ブルネイの44万人とは比べ物にならない程多く、地政学的位置を見ても大変に重要な国。
 - ・中国との関係では、ご多分に漏れず、中国が最大貿易相手国なのだが、それらのASEAN諸国の中でも対中貿易が全貿易に占める割合がミャンマー(対中貿易依存度31.4%)に次いで二番目に大きい(対中貿易依存度は27.7%。米国が第2位の貿易相手国だが16.3%に過ぎず、日本は6位の5.3%)。
 - ・ただ、ウクライナ戦争との関係で国連総会における対口非難決議に対しては、日本からの働きかけを受けて、フンセン首相の強いイニシアティブで、賛成するだけでなく、共同提案国にまでなった(選挙を控え、西側に恩を売った形か)。
 - ・日本は、そんなカンボジアとフンセン首相を基本的には支えてきた。カンボジア和平については日本は相当汗をかき、その後のPKOにも史上初めて参加。犠牲者を出しながらも関与を止めなかった。その当時からフンセン首相の義眼を日本が提供してきたことは有名だろう。
 - ・以上のカンボジアの二重苦に対しては、「結果を見て判断する」(マナエトの実際の外交上の立ち位置と統治能力、リアム海軍基地については、それが完成後実際どう使われるのか)ことが妥当と考えられる。
 - ・既述の植野現職大使も、インタビューに対し、今後の日カンボジア関係については、歴史的な強い信頼の絆に基づき、カンボジアに対して言うべきことは言い、状況が改善されるように手伝うものは手伝っていきたい、ということで、今後カンボジアが対外的なものも含めてどのような立ち位置を取っていくかを見極めながら関係をかじ取りしていきたいという冷静な反応。今後、米国も同様の反応をするように、日本からも働きかけていくべきだろう。

以上

りそな総合研究所 顧問 石井正文